

指導教授：Wessel de Jonge 教授（建築学部 建築工学科 建築遺産デザインコース i）

1

オランダ：（2019年8月30日～2020年4月12日）

【欧米のモダニズム建築における日本建築の影響】

日本関連の展示を行っている美術館・博物館と日本文化や日本建築の影響を受けているオランダ建築の視察を行った。

1) フィリップ・フォン・シーボルト関連の調査

1823-1829年の約6年間、長崎出島ⁱⁱに滞在したフィリップ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold）の日本コレクションが、ライデンのシーボルト博物館ⁱⁱⁱ・国立民族学博物館に保管展示されている。また、オランダで最も歴史のあるライデン大学の植物園にはシーボルトが日本から持ち帰った植物樹木種子も育てられており、園内には見事な日本庭園「シーボルト記念庭園」がある。

アムステルダム国立美術館には、長崎出島のオランダ商館長（1817-23年）であったヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）が日本人に作らせた出島の模型が展示されている^{iv}。



図2 シーボルト博物館に展示されていた日本地図



図3 ライデン大学植物園の「シーボルト記念庭園」

2) ロッテルダムに建つ日本建築「松風館」

現代のオランダにおける日本建築や日本文化の影響を知るため、2020年2月7日、ロッテルダム「松風館」を尋ねた。オーナーはオランダ人夫婦で、日本好きが高じ、もともと幼稚園だった建物を日本文化が体験できる空間に改修したという。室内遊戯場を居合道場^vに改築し、敷地内に本格的な茶室「洗心庵」と庭を日本から移築している。中途半端な理解で双方の建築を融合することはせず、日本とオランダそれぞれの建築の良さを、既存建築を残したり改修したりして生み出している。

3) その他

桂離宮を再発見し世界に広めたブルーノ・タウトの展覧会に合わせたカンファレンス^{vi}（4月23日・アムステルダム）への参加、デン・ハーグの日本庭園視察（6月）を予定していた^{vii}。



図4 壁の子供用荷物かけを生かした「松風館」ロビー



図5 「松風館」の庭に建つ日本から移築された茶室「洗心庵」

【モダニズム建築の価値評価の確立】

モダニズム建築^{viii}は欧米を中心に世界に広がった建築活動であるため、その評価方法もオランダなどを中心とした欧米諸国が作成したものが模範となっている。そこで日本建築の特徴や日本特有の価値観を取り入れ、今ある欧米の評価方法との齟齬を解消する。

1) オランダと日本の「住まい」に関するアンケート調査^{ix}

オランダ人が「住まい」の何に価値を置き、何を評価しているのかを明らかにし、それらが日本人もしくはオランダ人が日本の「住まい」を考えたときの視点とどう異なるかを明らかにする。

アンケート調査は、デルフト工科大学建築学部の教員・学生 55 名（内訳：オランダ人 35 名、外国人 17 名、その他 3 名）を対象に、2019 年 11 月から 2020 年 3 月にかけて行った。内容は、オランダと日本の住まいから想像する単語 5 つ・長所 3 つ・短所 3 つ、そして住まいを選ぶときの条件 3 つ（すべて自由回答）である。

実施したアンケートに基づきオランダの住まいに絞った分析を行った結果、想像する単語・長所・短所ではオランダ人と外国人で回答に出てくる単語とその数に差があること、一方で、住まいを選ぶ条件についてはオランダ人と外国人でほぼ差がないことが明らかになった^x。

2) オランダの住宅訪問調査

オランダの一般的な住まいを知るために住宅訪問調査を行った。デルフト工科大学の先生方にご協力いただき、9 世帯^{xi}で訪問調査とヒアリング調査を実施することができた。調査期間は 2020 年 2 月 20 日～3 月 15 日（Covid-19 により調査打切）である。訪問調査では写真と図面による住まい方の記録を行い、ヒアリング調査では増改築等の理由と住宅への思いを自由に語ってもらった。現在、それらの資料をまとめている。

3) オランダと日本の「住まい」に関するワークショップ

大学院の設計の授業で、オランダの住まいについてのワークショップを実施する予定（4 月 6 日）であったが、Covid-19 で授業がすべてオンラインになり、ワークショップも中止となった。

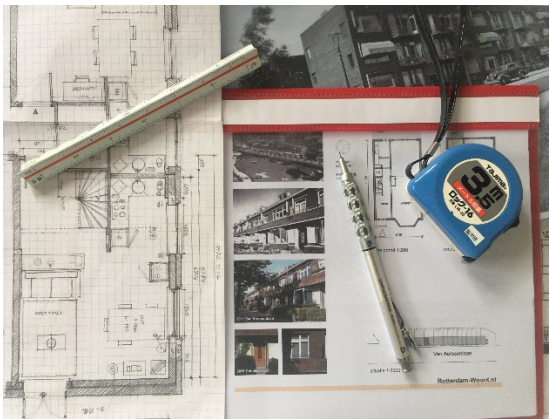


図6 オランダの住宅訪問調査資料と実測図

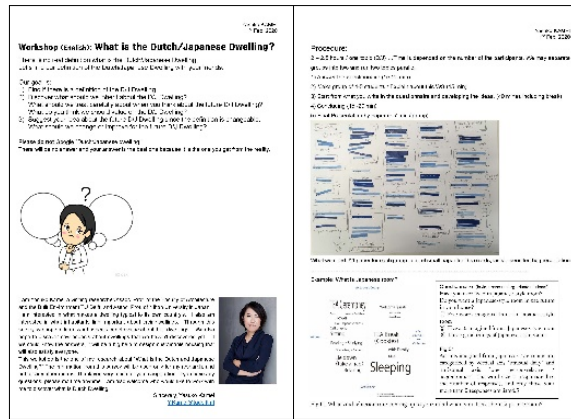


図7 実施予定だったワークショップのチラシ

4) 近現代建築の価値評価に関する授業への参加型調査

冒頭で少し触れたが、デルフト工科大学はモダニズム建築の価値評価の確立と普及に関する研究とその実践で世界でも先駆的役割を果たしており、その船頭役がドコモモ^{xii}である。ドコモモは、デルフト工科大学の Hubert- Jan Henket 教授と Wessel de Jonge 教授によって 1988 年に設立されたモダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織である。設立当初は記録と保存の側面が強かったが、2016 年のソウル大会で、その理念に再利用・サステナブルの項目が加わり、柔軟性を持った活動へと展開している。デルフト工科大学は、歴史的な価値づけが難しい近現代建築についても分かりやすい価値評価の指標を作成し、授業でその手法を指導している。以下に、参加した 2 つの授業について報告する。

■ MSc3 AR3AH100 “Adapting 20C Heritage” Almere Haven（期間：2019 年 9 月 2 日～2020 年 7 月 7 日）

都市の人口増加の現状に合わせ政府が掲げた「1 MH（Million Home）政策：2030 年までに 100 万戸の住宅を供給する」を基にした建築工学科修士学生向けの授業である。アムステルダム郊外のアルメーレ住宅地を敷地に、開発当初の設計コンセプトと 40 年かけてつくられた住環境を調査・分析・評価し、今ある価値を残しつつ新たな価値を生み出す空間を挿入することで持続可能な住宅地として対象地域の高密化を図るものである。

授業はクォーター制で、第 1・2 Q で対象地域と建物の調査・分析・価値評価をグループで行い、第 3・4 Q で設計・提案を個人で行う。指導は、責任者兼設計（Design）担当の Lidwine Spoor、材料施工技術（Technology）担当の Wido Quest、建築価値評価（Value）担当の Nicholas Clarke の 3 名で行っていた。第 1・2 Q では、図 9 に挙げた価値評価マトリックスを用いて、敷地・周辺環境・建物・外観・設備などの 9 項目を、歴史的価値・利用価値・建築的価値などの 9 項目で評価していく。このマトリックスは完全なものという扱いではなく、対象によって項目が変更することもあり、学生も教員も議論を重ねながら柔軟な評価をしていた。

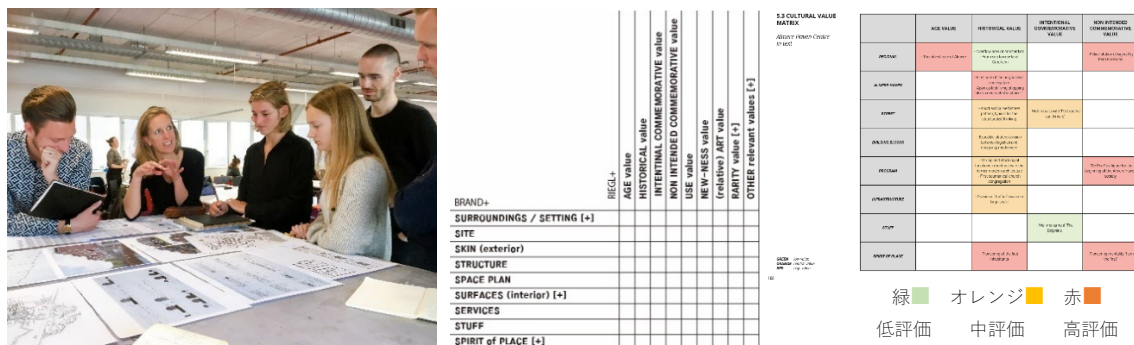


図8 Adapting 20C Heritage の授業風景 図9 価値評価マトリックス(左)とそれを基に学生が作成したマトリックスの一部(右)^{xiii}

■ AR0108 Heritage and Values CRASH（期間：2020年2月12日～2020年4月8日）xiv

保存（Conservation）、再活用（Reuse）、建築（Architecture）、持続可能性（Sustainable）、遺産（Heritage）の5つの領域から建物を評価し、改修・コンバージョンなどの設計を行う。今年度から始まる新たな授業で、今までの価値評価マトリックスに持続可能性と再活用の項目を加えている。コース内の異なる専門分野の教員が共同して担当しており、設計者や管理者へのヒアリングも行う実践を交えた内容である。5人一組でグループを組んだ学生たちは、それぞれが5つの領域どれかの責任者となり、課題となっている実際の建物の調査分析と持続可能な建築とするための提案を行う。

【モダニズム建築の普及】

最近では日本でも一般向けの建築ツアーや建築公開などが増えてきたが、欧米諸国はそうした活動を日本に先駆けて行ってきた。オランダもその例外ではなく、観光のひとつとして運営されているものや、季節行事になっているもの、市が主催しているものなどその種類も多様で、4月から9月の気候がいい時期をメインに開催されている。観光客や一般市民も気軽に参加しており、建築関係者やその専門家しか集まらないような閉じた雰囲気はない。オランダで建築文化が一般に浸透してる証と言えよう。以下、参加したものから特徴のある3つの催しを紹介する。

■Welcome Delft (2019 年 9 月 27 日)：デルフト市による新規移住者向けのイベント。ボランティア団体 ACCESS が運営し、暮らしのアドバイスや街歩きツアーが行われる。

■オープンモニュメント（2019年9月14・15日）：オランダ全土で開催され、普段は入ることができない市内の建物などが一般に公開される^{xv}。

■AFFR (Architecture Film Festival Rotterdam) (2019 年 10 月 9～13 日)：ロッテルダムで開催される 2 年に 1 回の建築映画祭。世界各国の建築・都市・まちに関連する映画が上映され、一部、監督や建築関係者によるディスカッションが行われる^{xvi}。



図10 Welcome Delft で街の解説をするボランティアが



図11 オープンモニュメント(当時の様子を寸劇で紹介)

シンガポール：

■第8回 mASEANa^{xvii}国際会議“Progressive Once More: Rejuvenating Mid-Century Modern Architecture in Southeast Asia”、同学生ワークショップ（2019年10月30日～11月2日）

シンガポールを含めた東南アジアが抱える近現代建築遺産の解体・再開発の危機に対して、20世紀半ばの独立後の国家建設時代の建物を中心にその価値を社会的・経済的・歴史的・文化的に捉える内容である。また、環境の持続可能性や都市の生存可能性、近現代建築遺産への一般への関心やリテラシー促進についても議論が展開した。

学生ワークショップでは、シンガポールの近現代建築を対象に、日本とシンガポールの学生がグループで調査を行い、調査対象建築の現状と価値評価そして今後の課題を報告した。



図12 mASEANa 国際会議での集合写真(一番右)



図13 mASEANa 国際会議

アメリカ：

■DOCOMOMO US シンポジウム（2020年6月3～6日）^{xviii}

（Covid-19 パンデミックにより延期になったためキャンセル。）

【謝辞】

オランダでの受入担当指導教授：Wessel de Jong 教授、担当教員：Wido Quest 助教、Lidwine Spoor 講師、Hielkje Zijlstra 准教授、担当秘書：Linda van Rijsbergen さんをはじめとするデルフト工科大学建築学部建築工学科の先生方とスタッフの皆様には、滞在期間中のお心遣いと研究へのご協力に心より感謝申し上げます。

また、日本からご支援くださった学科主任：師橋憲貴教授、居住空間デザインコース担当：渡辺康教授、建築事務室：田原あゆこさん・新井良美さんをはじめとする建築工学科の皆様、学部長：清水正一教授・前学部長：落合実教授、庶務課：高橋未起さんをはじめとする生産工学部の皆様、そして日本大学本部の皆様にご心より感謝申し上げます。

特に今回は、新型コロナウイルス感染症に伴うオランダのインテリジェントロックダウン、緊急帰国、日本における緊急事態宣言など、予想だにできなかった事態で皆様に多くのご心配とご迷惑をおかけいたしました。一人一人のお名前を挙げてお礼をしたいところではございますが、紙面の都合上割愛させていただきますことご容赦ください。

改めまして、皆様のお心遣いに御礼申し上げます。どうもありがとうございました。



図14 担当の Wessel de Jonge 教授(左) デルフト工科大学建築学部建築工学科建築遺産コース教員・スタッフ(右)

ⁱ オランダ名称は Faculteit Bouwkunde, Afdelingen Architectural Engineering and Technology, Heritage & Design。英訳は Faculty of Architecture and the Built Environment, Department Architectural Engineering and Technology, Heritage & Design。オランダ語の学部名 Bouwkunde は建築に関係する多くの意味を含むため、的確に表現できる英語がなく、英訳が非常に難しいとの話であった。

ⁱⁱ 日本とオランダの関係は 1600 年にオランダ船デ・リーフデ号が九州に漂着した時から始まっている。1641 年から 1859 年までの 200 年以上の間、オランダは日本と国交が許された西洋諸国で唯一の国であった。その時オランダ人の滞在が許されたのが長崎出島のオランダ商館である。

ⁱⁱⁱ 長崎出島の復元を行った波多野純先生の紹介で、シーボルト博物館に勤めるフォーラ邦子氏にヒアリングをさせていただき計画を立てていたが、緊急帰国に伴い残念ながら実現できなかった。なお、フォーラ邦子氏のパートナーであるティー・フォーラ氏はライデン国立民族学博物館の主任学芸員でありシーボルト講座の教授である。

^{iv} 波多野純「長崎出島復元からみた西欧人の和室理解」

^v 案内してくださった Joris van Nispen さんは居合道師範を持っている。

^{vi} EFL (European Federation for Living), "Cooperative Housing Lessons from the past, solutions for the future: How new forms of cooperative housing can tackle current housing challenges in Europe and in the Netherlands", Invitation Conference on 23 April 2020 Amsterdam

ブルーノ・タウトから始まる集合住宅の歴史と、オランダとヨーロッパ諸国における住宅の現状に関する

カンファレンスであったが Covid-19 によって延期（開催日未定）となった。本会議は、ブルーノ・タウトの美術館開館（2020 年 6 月 1 日に開館）に合わせた催しでもあった。タウトは「ニッポン」「日本の美再発見」などの書籍で日本の建築界にも影響を与えている。

<https://www.hetschip.nl/en/visitors/activities/conference-cooperative-housing>

vii デン・ハーグにある Clingendael Park の”Japanese Tuin”は 1910 年につくられたオランダ最古の日本庭園である。年に 2 回（春と秋）一般開放している。

<https://www.denhaag.nl/en/in-the-city/nature-and-environment/japanese-garden-in-clingendael-park.htm>

viii ここでいうモダニズム建築とは、モダン・ムーブメント建築のことであるが、今後の展開も鑑み、近現代建築という大きなくくりで調査・研究を展開することとする。日本のモダン・ムーブメント建築は 1930～1970 年代に作られた建物と定義されている。日本の建築遺産の登録には 50 年という時間の縛りがあるが、オランダでは建てられたその瞬間から建築遺産として選定・登録することができる。昨今ヨーロッパでは 50 年といった時間の縛りをなくす考え方にも一定の賛同が得られている。

ix 本アンケートでは建築文化の一般市民への普及に関連する調査も同時に行う予定でいたことから、専門家と一般市民間の建築を見るとき視点の差を明らかにするために、デルフト工科大学に通う海外からの研究者とその家族、オランダに住む日本人、デルフトに住む一般市民向けにオランダ語版・日本語版のアンケート用紙も作成していたが、数名にテスト回答していただいたところで止まっている。

x 本調査結果については、6 月 11 日、デルフト工科大学建築学部建築工学科建築遺産の 3 コース合同で行われた Zoom 中間報告会で報告した。

xi 15 世帯から調査協力を得ていたが、その内 6 世帯は 3 月半ば以降に予定していたため未実施となった。

xii ドコモモ=DOCOMOMO は、Documentation and Conservation of buildings, sited and neighborhoods of the Modern Movement の頭文字をとったものである。

xiii Rada Ruijter, Sean Huizinga, Linde Petit dit de la Roche: “GEWOON ALMERE HAVEN CENTRUM: Analysing on city planning, architecture, technology, demographics and values”, Studio 20C Heritage - Almere Haven, P1 Report, pp162, 2020

xiv 5 つの領域それぞれの頭文字をとって CRASH と呼んでいた。Covid-19 パンデミックによりオンライン授業に移行されたが、建物の調査・分析が十分に実施できず、学生同士のオンライン上でのグループ作業も困難を極め、最終的な授業成果や学生による調査結果・設計改修提案については把握できなかった。

xv 建物によっては建築・歴史ツアーなども同時に開催される。デルフト市内では 43 の建物が公開された。

xvi 2019 年は Film53 作品、Short Film32 作品が公開され、19 の催し物が開催された。

xvii mASEANa (modern ASEAN architecture) Project (マセアナプロジェクト) は 2015 年 11 月に発足し、2020 年までの約 6 年間、東南アジアの近現代建築について日本と現地の人々で考える相互貢献型の国際プロジェクトである。1) 東南アジアのモダニズム建築の目録を作成する、2) 東南アジアのモダニズム建築の歴史を書く、3) 東南アジアのモダニズム建築の保存方法を提案する、を目標としている。

xviii モダニズム建築の巨匠フランク・ロイド・ライト (F. L. Wright) の世界遺産を含む作品についての講演会と見学会、DOCOMOMO US 25 周年に合わせたアメリカのモダニズム建築に関する総括的な講演会、開催都市シカゴのモダニズム建築の見学会に参加する予定であった。開催地シカゴはモダニズム建築の宝庫と呼ばれる都市で、建築専門家に限らず世界から観光客などがモダニズム建築を見に訪れる。また、メインテーマであったフランク・ロイド・ライトは、浮世絵を蒐集するなど日本から大きな影響を受けていることでも有名で、日本にも建築作品を残している。